

『28時の試験電波』 本郷 映

思い返してみると、小さい頃から夜はよく眠れない人間だった。眠れないというのは苦痛であり、朝が遠くて不安である。

音楽を聴きながら眠るということを覚えたのは確か小学校高学年の頃。祖母から大きなラジカセを借りて枕元に置き、ノイズ混じりのラジオが子守唄の代わりとなった。中学に上がるとウォークマンを手に入れて、すぐさま容量いっぱい音楽を詰め込んだ。好きな音楽を聴きながら眠りに落ちることができるなんて最高じゃないか。

それでも、夜は孤独だ。ひとりぼっちだ。特に夜明け前は、世界に自分ひとりだけが取り残されたような寂しさがそこにある。そんな時は、必ずテレビを点ける。この時間となれば、どこも番組は終わっている。それは十も承知で、本当の目的はコールサインと試験電波だ。

一日の放送が始まる時と終わる時は、放送局を識別するために発行される呼出符号をコールすることが法律で定められている。県内の四季折々の景色や仙台の街中の風景をバックに、各地から発せられる周波数はエンドロールのように流れる。そしてコールサインが2回繰り返され本日の放送の終了が告げられると、余韻がぶつ切りにされるように画面には砂嵐、もしくは長い「ピー」音が流れたままお馴染みの“カラーバー”が映し出される。

そんな中、ある放送局だけは天気予報を交えつつ、お天気カメラで映し出す仙台駅前の風景を延々と流していた。なんの変り映えのない、静まり返った仙台駅だ。でも、よく目を凝らして見ると、時折タクシーが走っていたり、人が歩っていたりする。遠くに見えるビルにも、ほんの少し明かりが灯っている。それを見つける度に、どこか孤独から少し開放されている自分がいた。ひとりぼっちだと思っていた世界に自分以外の誰かが確かに存在していることが、どこか救われた気持ちになるようで嬉しかった。その瞬間、私はテレビではなく、窓から少しずつ移り変わる風景を見ている感覚であった。